

第9回本会レジュメ

08/11/26

テキスト『空想から科学へ』

担当：宮田 諭

I はじめに

II フリードリヒ・エンゲルス

II 「空想から科学へ」解説

III 参考文献・案内文献

I 政治、経済、哲学、思想、生活、あらゆる分野で大きな転換期となった19世紀後半、そのなかでも必然的、かつ革新的な理論といえる「科学的社会主義」20世紀にソ連の崩壊で失敗とみなされているが、彼らの基礎的理論とは？目指したユートピアとは？を学べる機会になったら幸いです。

II フリードリヒ・エンゲルス

1820年バルメン生まれ、父は紡績会社の経営者。

マルクスの仕事をも心両面から助け、時には共同で書物を書き、『資本論』の完成に絶大な援助をし、マルクスが未完まま残した『資本論』第2部、第3部を整理し出版した。

Ⅲ『空想から科学へ』解説

社会主義とは？

- ・階級対立、無政府状態(自由市場)から誕生
- ・理論的にはフランス啓蒙主義思想を受け継いでいる。

社会の思想は

- ・その社会の経済的な土台の反映として生まれる、同時にそれまでの社会の思想や理論を基礎に於て発展。

1. 空想的社会主義・・・科学的社会主義以前の社会主義である。

①空想的社会主義

- ・フランス啓蒙主義「観念論」を受け継いでいる。ルソー、
ヴォルテール、ディドロ
- ・代表的な3人、サンシモン、シャルル・フーリエ、ロバート・オーエン

②サンシモン

- ・フランス革命「怠け者(貴族、僧侶)に対する働いている広大な国民大衆の勝利」
- ・「科学と産業」による指導と支配・・・天才的ひらめき
 - 第一に関心のあることは「もっとも数が多くもっとも貧しい階級」

↓

『国家の廃止』(未熟)

③シャルル・フーリエ

- ・「女性の地位」について、ある社会における婦人の解放の度合が全般的な解放の自然の尺度
- ・歴史を、未開→野蛮→家父長制→文明(ブルジョワ)
- ・「文明時代には貧困は過剰そのものから生じる」－弁証法的である。

④ロバート・オーエン

- ・先駆的役割
- 「性格形成論理」人間の性格は生まれつきのものではなく環境によって作られる。
- 「アメリカ村」－失敗・・・余剰価値
- 「婚姻の形態」を問題視
- ・その他、1819年工場法、1834年全国労働組合大連合、共同組合、貨幣廃止

2. 弁証法的唯物史観

- ・ドイツで近代哲学が生まれ、ヘーゲルが完結、思考の形式を弁証法

- ・弁証法とは

物事を変化するものとしてつかまえる、それからお互いに連関するものとしてとらえる、さらに運動し、変化するものとしてとらえる。ギリシアの時代からあったが哲学では形而上学にはまりこんでいき、18世紀には失われてしまった。

例：人間一人間のなかの細胞というものは、絶えず死んで、絶えず新しい細胞がつけられているのだから「我々はいつも死につつある」しかし、「細胞とは何？」

- ・この見解は、たとえ現象の全体の性格（法則）を正しくとらえても、全体の姿を構成している個々の物事を説明するのには十分ではない

- ・そこで「自然科学と歴史研究」（形而上学的）が必要になる。

- ・形而上学的な考え方

弁証法を「森をみる」とすると形而上学的は「木をみる」

自然をその個々の部分に分解すること、種々の自然過程と自然対象を一定の分類に分けること、生物体の内部をその多様な解剖学的形態にしたがって研究することは、最近400年間に自然を認識するうえでおこなわれた巨大な進歩の根本条件であった。

しかしそれは運動しているものではなく、静止しているものとして、本質的に変化するものではなく固定不変のものとしてとらえる習慣をのこした。

① ヘーゲル

「内的合法則性」

自然界だけではなく人間の社会もたえず変化、その発展過程の内部には法則性がある

- ・問題点、知識の限界、かれが観念論者だった。

「人類の発展はイデー＝理念の現実化された模写にすぎない」

② 弁証法的唯物論

これまで、哲学はすべての学問の王様だ←弁証法があるから必要なし

例：「認識論」←生理学で説明可

- ・階級闘争→社会を進めているのが19世紀になりはつきりと現れる→アダム・スミス失敗

③ これまでの歴史は原始状態を例外として階級闘争の歴史←経済諸関係の産物

だから「社会のそのときどきの経済的構造が現実の土台となる」

「社会主義は（空想社会主義のような）天才的頭脳の偶然的な発見ではなく、プロレタリアートとブルジョワジーの闘争の必然的な産物」

- ・完全な社会主義を仕上げるのではなく、階級闘争の過程を研究し、そのなかに、衝突の解決の手段を発見する。

- ・剰余価値の発見「一方における富の蓄積は他方における貧困の蓄積」by マルクス

3. 資本主義の発展とその矛盾、科学的社会主義

◦唯物史観

生産が、そして生産のつぎにはその生産物の交換がすべての社会制度の基礎

すべての社会的変動と政治的変革の究極の原因は人間の頭のなか、ではなく生産様式と交換様式の変化に求めるべき

・資本主義的生産様式とその担い手であるブルジョワジーは生産そのものを個人的行動から社会的行動に、生産物は個人の生産物から社会的生産物に変えた。→「商品化」

・封建制度＝身分制特権←ブルジョワが壊す

↓

「商品所有者たちの同権」

・社会的生産と資本主義的取得の矛盾（基本的矛盾）

「資本主義は私有財産制の否定」 by マルクス

・基本的矛盾から「プロレタリアートとブルジョワジーの対立」「生産の無政府状態」

「産業予備軍」「恐慌」

では最終的にはどうするか？

「所得を社会的性格にする」

↓

生産手段の社会的管理。人間が社会法則を使いこなせる

どうすればよいのか？

「プロレタリアートの国家権力の掌握、生産手段の国有化、すべての階級差別と階級対立を廃止」

・国家とは本来全社会の代表者だが、階級社会では階級支配の機関となっている、それをなくすことで、国家はほんとうの社会全体の代表者となることができる」そうすると権力支配はいらなくなり「死滅」する。

これは、「必然の国家」から「自由の王国への人間の飛躍」

IV参考文献

『空想から科学へ』 エンゲルス 石田精一：訳 新日本出版）

『エンゲルス 空想から科学へ』（浜林正夫 学習の友社）

文献案内

『社会経済学』（大谷禎之介 桜井出版）

